

『恵みと平安の源』

'22/02/13

聖書箇所: エペソ人への手紙 1章 1-2節 (新約 p.373)

つい最近まで、八田西 CC では、マルコの福音書のみことばを2年ほどかけて、学んできました。また、つい先週末までは、たった3回ですが、イエス様がマタイ 13章で教えてくださった「天の御国の奥義」に関する例え話から学びました。…正直、私は、それらの学びから教えられたことが多くて、改めて、神様に感謝することができましたが、皆さんは、いかがだったでしょうか？

さて…、今日から私たちは、許される限り、「エペソ人への手紙」に記されてあるみことばを学んでいきたいと思えます。このエペソ書には、救いに関する教えや奥義…、また、教会に関する教え、クリスチャンとしての成長、家族や夫婦についてなど…、私たちにとって、とても必要な教えがたくさん詰まっています。皆さんには、どうか、心して学んでいただきたいと思えます。また、私自身も、正しく…、また、分かり易く、みことばを取り次ぐことができるように、お祈りいただきたいと思えます…。

命題: 本当の恵みや平安とは、どこから来るものなのでしょうか？

ここ、エペソ 1:1-2 は、この手紙の序文とも言える箇所ですが…、そこには、この当時の習慣であった、手紙の差出人と、その宛て先、それに簡単な挨拶文があるだけです。しかし、無数にある言葉や表現の中から、ここに記されてあるような言葉遣いや表現を選んだのは、聖書のみことばを書き記した著者だけではなく、その背後におられる聖なる神様がおられるわけで…、そこには、みことばの教えるクリスチャンとしての、重要な要素が教えられているのです。

今日は、ここエペソ 1:1-2 を通して、神様の与えてくださる…、本当の恵みや平安とは、どこから来るものなのか？ということをご一緒に学んでいきたいと思えます。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、エペソ 1:1-2 をお開きください。そこには、こう記されてあります。

- 1 神のみことばによるキリスト・イエスの使徒パウロから、キリスト・イエスにある忠実なエペソの聖徒たちへ。
- 2 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。

I・キリスト・イエスとの 関係 において…(1節)

どうか、皆さん。まずは、ここでパウロが、差出人である自分自身と、宛て先である教会を表現するために、『キリスト・イエス』という言葉や、わざわざ“2度も”くり返し使っている！ということに注目してください。彼らは、それぞれが、『キリスト・イエス』との関係において、新しくされ…、そこから、交わりと、恵みや平安を与えられていたのです。

● 差出人: 『神のみことばによるキリスト・イエスの使徒パウロ』

① 神のみことばによる…

ここ 1節で、パウロは、自らのことを、『神のみことばによるキリスト・イエスの使徒パウロ』と語っています。一体、パウロとは、どのような人物だったのでしょうか？⇒実は、パウロの、元々の名前は、「パウロ」ではなく、「サウロ」と言いました。…実は、この当時のユダヤ人たちの多くは、新しく生まれてきた子どもたちの名前を、その先祖から付けることが多かったようです(ルカ 1:59-61)。そういった中で、パウロの両親は、自分たちの子に、「サウロ」と名付けたわけです。これは、イスラエルの最初の王であった、サウル王様にあやかったものでした。何故なら、このサウル王様は、パウロと同じ…、イスラエル12部族の内の、「ベニヤミン族」の出身であったからです。パウロは、自分たちの先祖の中で、最も有名な人物から、その名前を付

けられたのです。

また、彼は、『ガマリエル』(使徒 5:33-40; 22:3)という…、当時、最高の教師であり…、多くの者たちから尊敬されていた律法学者から、教えを受けました。そういったこともあって…、クリスチャンになる前のパウロは、逆に、クリスチャンを迫害し…、クリスチャンたちを捕まえては、殺したりもするような…、グループのリーダー的な存在であったのです。彼は、「そうすることが、真の神様に喜ばれることだ！」と信じて、行動していたのです…(使徒 9:1-2; ピリピ 3:6; I コリント 15:9; ガラテヤ 1:13; I テモテ 1:13)。

そんなパウロが言うのです…、「自分は、『神のみことば』によって、選ばれたのだ！」と…。確かに、そうです。パウロは、神様によって、特別に選ばれた器であったのです！パウロが、どのように、神様に導かれ…、信仰を持つに至ったのか…、それは使徒 9章に書かれてあります。非常に、ドラマティックなストーリーです。

しかし、パウロほどではなくても、私やここにおられる多くの皆さんも同じです！天の神様は、それぞれ、その人たちに合った方法で、私たちを神様の元へ…、また、教会へと導いてくださったのです！…神様が選ばれたのは、何も、このパウロだけではありません！ここにおられる、救われた皆さんもパウロと同様に、神様が特別に選んでくださったのです！そのことについては、1章の4節でも教えられているので、その時に学びましょう。しかし、神様は、明らかな御意志をもって…、また、目的をもって…、パウロと同様に、皆さんをも選んでくださったのです！

②キリスト・イエスの使徒…

パウロは、ここ 1節で、自分のことを、『キリスト・イエスの使徒』と呼んでいます。実は、この『使徒』という言葉(ἀπόστολος)は、一般的には、「権威と使命を与えられて、特別に派遣された者」を意味します。もっとも、聖書では、この言葉を…、イエス様から、直接、特別な働きのために任命された働き人を指しています。具体的な条件としては、使徒 1章を見てみると、①第1に、イエス様の、直接の復活の証人…、つまり、復活した後の、イエス様にお会いしている者でないといけません。②もう1つは、イエス様から、直接、教えを請うた者である必要がありました。パウロは、イエス様から、直接、この働きに任じられ、また、イエス様から直接教えを受けて、その働きを全うしていったのです。パウロは、その働きのために、自分の命さえ惜しまずに捧げるほど、神様に対して忠実に歩み続けるような者でありました…。

それと、実は、この手紙は、ローマの獄中で書かれた、ということで「獄中書簡」とも呼ばれています。例えば、使徒 28章のみことばが教えてくれているのは、パウロは福音伝道に携わったために、『満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、』(使徒 28:30)とあります。言わば…、軟禁状態のような状況の時に、この手紙を書いたと考えられています。ですから、エペソ 4:1には、そのことを匂わせるような、『主の囚人である私…』という表現がありますし、エペソ 6:20には、『私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。』とあるのです。

初めにお話ししましたように、パウロは、非常に良い環境の中で生まれ育ちました。言わば、エリートでありました。そういったようなことは、パウロ自身も、ピリピ 3:4-9で証ししていますが、パウロは、当時のユダヤ人であれば、誰もが羨むような環境で、生まれ育ったのです。本当に、エリート中のエリートだったのです…。しかし、そんなパウロが、「サウロ」という、かつての自分の名前を捨てて…、かつての自分の栄光を捨てて…、神様が自分を召してくださった目的である…、特に、『異邦人』に福音を伝えていく者(使徒 9:15; ガラテヤ 2:8; I テモテ 2:7; ローマ 11:13)として、ユダヤ人としての名前を捨てて、それまでの「サウロ」ではなく、ギリシャ語の名前である『パウロ』として、生きていくことを選んだのです。

パウロを、そのように変えたのは、他ならぬ、イエス・キリストでありました。恐らく、パウロは、そのイエス様の人格よりも、神様としての性質を強調しようとして、イエス・キリストではなく、『キリスト・イエス』と表現したのでしょう。ちょっと、皆さん。前の画面に表示されるピリピ 3:5-9 をご覧くださいませ？『5 私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きついのへブル人で、律法についてはパリサイ人、6 その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。7 しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあかたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、9 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。』

先週、私たちは、イエス様が語ってくださったマタイ 13 章に記されてある例え話から、本当に救われた者は、どんな行動を取る？ということを知りました？…天の御国、つまり、救いということの素晴らしさを知った者は、それ以外の何を捨てても、絶対に救いを手に入れたい！救われたい！ということをお願いでしよう？

だから、これまた、先週に引用したみことばですが、イエス様も、マタイ 16:24-26 で、こう教えてくださいました。『24 それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。25 いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。26 人は、たとい全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありましょう。そのいのちを買い戻すには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。』って…。

⇒イエス様は、ここで、2種類のいのちについて教えてくださいました。1つは、私たちが通常の話でイメージする、「この地上でのいのち」のことです。そして、もう1つのいのちは、26 節で出てくる『まことのいのち』、つまりは、「永遠のいのち」のことであり、救いです！…こういったことが分からないと、イエス様の言葉は理解できません！…ここでイエス様が問うてくださっているのは、「あなたは、この地上でのいのちと永遠のいのち(=救い)と、どちらを優先しますか？」ということなのです。そうでしょ！

どうぞ、もう1度、ピリピ書のみことばに戻りましょう。ここでパウロは証ししてくれています！かつて、自分にとって、価値があると思っていたものを全て、キリストの故に、損と思っているって…。一体、どうしてか？⇒8 節、『それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに…』とありますでしょ？つまり、イエス様の正体を知って救われたからです！…でも、イエス様の正体を知っているのは、パウロだけでしょうか？また、イエス様のことを主として迎え入れたのは、このパウロだけでしょうか？行ないではなく、信仰によって義とされたのは、このパウロだけでしょうか？…違いますでしょ！私たちが、このパウロと同様に、イエス様の正体を知っているし、このパウロが感謝しているのと全く同じ救いを、真唯一の神様から受けたのです！そうでしょ！皆さん！

…だったら、私も、皆さんも、このパウロと同じように、言えるはずなのです、「私も、キリストのためなら、自分の経歴や、様々なものを捨てることができる！」って…。如何でしょうか？私たちは、このパウロと同じように言えるでしょうか？

神様は、イエス様を信じて、救われた者たちに、どのような祝福を与えてくださったのでしょうか？⇒実は…、そういったことは、次回に学んでいく、エペソ 1:3 以降で学んでいこうと思っています。しかし、そういったことを、皆さんが、本当に理解してくださるなら…、このパウロのように…、私たちが…、『私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思(う)』程、大きく価値観が変え

られるのです！神様は、それほどまでに素晴らしい祝福を、クリスチャンである私や皆さんに与えてくださったのです。

●宛て先:『キリスト・イエスにある忠実な(エペソの)聖徒たち』

①キリスト・イエスにある…

さて、今度は、もう1つの関係について見ていきましょう。それは、手紙の宛て先です。ここでも、パウロは、宛て先である教会を紹介するために、もう1度、『キリスト・イエスにある…』という言葉を使っています。しかし、日本語では同じように訳されていても、原語では、この、『キリスト・イエスにある…』という表現にはほんの少し違いがあります。先の場合は、明らかに所有を表わしていた…、つまり、パウロは、キリストのものであり、キリストの使徒である、ということだったのですが、ここでは、「キリストの内にいる、一体とされている…」というような表現がなされています。

イエス様を信じて、救われた私たちは皆、キリストと継ぎ合わされ…、一体とされたのです。そういったことを、みことばは何度も教えてくれています。例えば、有名なのは、ヨハネ 15 章です。私たちは、『まことのぶどうの木』(ヨハネ 15:1)である、イエス様につながっていますよね。そうじゃないと、私たちは、『何もすることができない』(ヨハネ 15:5)のです。また、ローマ 6:3-4、『3 それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたものではありませんか。4 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです。』⇒このみことばが教えてくれるように、私たちはイエス様を信じた時に、キリストに継ぎ合わされ、キリストと一体となったのです。だから、私たちは、キリストと共に葬られ、キリストと共に、よみがえらされたのだ！とみことばは教えるのです。

このようなみことば以外にも、ガラテヤ 3:27 では、『バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。』ということが教えられていますし、コロサイ 2:12 でも、『あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。』と、同じことが教えられています。

良いです？皆さん！イエス様を信じ、救われた私たちは、かつての古い衣を脱ぎ捨て、新しいキリストの衣を着る者とされたのです。そういったことについても、パウロは、この…、エペソ 4:22-24 辺りでも教えてくれています。私たちクリスチャンは皆、キリストと一体とされたのです。

②忠実な…

そして、その次にある言葉は、『忠実な…』という言葉です。この言葉(ΠΙΣΤΟΣ)は、当然、「忠実な…」とも訳せる言葉なのですが、実は、「信じている、信頼している、信仰者」とも訳せる言葉なのです。現に、新共同訳聖書は、ここを、忠実とは訳さずに、「エフェソにいる聖なる者たち、キリスト・イエスを信ずる人たちへ。」と翻訳しています。また、新改訳でも、こと全く同じギリシヤ語を、II コリント 6:15 では『信者』、I テモテ 4:3 では『信仰があり…』というように訳しています。確かに、ここエペソ 1:1 のみことばだって、『忠実な…』ということではなく、「信者」というように訳すこともできます。しかし、いずれにしても、そう大差ないと、私は考えます。

何故なら、聖書のみことばはこう教えるからです、「信仰者とは、忠実な者ですよ！」って…。当然、神様に対して忠実である、ということです。神様に対する忠実さ…、それは、一部のクリスチャンだけが持っているような性質ではありません…。全てのクリスチャンたちが持っているものなのです。だって、みことばは、神を信じ、救われた者は、必ず神の前に忠実であることを教えているじゃないですか！それは、例えば、最近見た、マタイ 7:21-27 で教えられていた、『みこころを行う者』や、マタイ 25:14-30 で教えられて

いる、『良い忠実なしもべ』の話からも、それは明らかです…。

③エペソの…？

それと少し関連あるのですが、ここ 1 節では、『…キリスト・イエスにある忠実なエペソの聖徒たちへ。』とあります。この「エペソ」といいますのは、小アジアにあった古い都市で、現在ではトルコの領になります。でも、皆さんの聖書の、欄外注には何とありますか？⇒「異本、「エペソ」を欠く」とありますよね？実は、最近の聖書研究で分かってきたことは、数多くある写本の中で、最も信頼できると考えられている、古い写本(チェスター・ベーター・パピルス P⁴⁶、シナイ写本、ヴァチカン写本 B など)は、決まって、この…、『エペソの…』という言葉が抜けているのだそうです。ですから、最近の聖書研究者たちは、この手紙が最初、パウロによって書かれた時には、この、『エペソの…』という言葉が無かったと考えます。

そして、そう考えると、幾つか、納得のいくこともあるのです。このエペソの町ですが…、パウロは、この手紙を書く前に、少なくとも、2回訪問し、最低でも2年以上は滞在しています。…にも関わらず、パウロは、この手紙の中で、ほとんど、そういった個人的なことについて触れていないのです。また、ある写本(=マルキオンの正典)には、この手紙の中に、「ラオデキヤ人へ」という言葉が入ったものもあるようで、そういったことを考え合わせると、この、「エペソ人への手紙」は、エペソ教会だけでなく、小アジアに向けて書かれた、回状(=回覧板のようなもの)というように考えることが、妥当であると思われまふ。恐らく、エペソで、1番最初に読まれ、それが幾つもの教会に回されていったのかも知れませぬ…。

実際、黙示録 2-3 章には、『エペソ、スミルナ、ベルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィヤ、ラオデキヤ』といった教会の名前が挙げられています。また、コロサイ 4:16 には、こんな記述もあるのです。『この手紙があなたがたのところで読まれたなら、ラオデキヤ人の教会でも読まれるようにしてください。あなたがたのほうも、ラオデキヤから回って来る手紙を読んでください。』…このように、当時、パウロの手紙は、回状のようにして、手紙が回され…、多くのクリスチャンたちに読まれていたことは明らかです。

④聖徒たち

そして、その…、宛て先の最後の部分には、『聖徒たち』とあります。神様は、私たち…、罪を赦されたにしか過ぎない…、今も罪人の私たちを…、「聖い者」としてくださったのです。それこそが、信仰による義認です。イエス様を唯一の神…、救い主と信じる信仰によって、与えられる神様の義です。だから、みことばは、こう教えますでしょ？ガラテヤ 3:8、『聖書は、神が異邦人をその信仰によって義と認めてくださることを、前から知っていた…』って…。また、使徒ペテロは、こう教えます。1ペテロ 2:9、『しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。』って…。

クリスチャンである皆さん。確かに、私も含めて…、私たちは、今現在も、罪を犯し続ける罪人です。しかし、神様は、私や皆さんのことを「聖い者」としてくださったのです！立場的に…、そして、立場的に聖くされた者たちは、「聖く生きたい！聖くなっていきたい！」と願うものなのです。…神様は、あなたを、この世から選び出してくださいましたのです。だから、私たちクリスチャンは、罪があっても天に行くことができるし…、元々は、この世から生まれた者なのに…、何となく、この世に対して、違和感を感じるし…、この世にどっぷりと浸かりたくない…、と考えるのです。それは、あなたが、神様によって、もう既に、この世から聖め分かれたからなのです。どうぞ、そのことを忘れないでください…。

II・真唯一の神様＝主イエス・キリスト から…(2 節)

続く 2 節で、パウロは挨拶を書き記すわけですが、ここで、本当の恵みと平安とが、どこから来るものなのかということ、をはっきりと教えてくれています。それらは、聖書の教える…、真唯一の神様から…、つまりは、主イエス・キリストから来るのです。

2 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。

●『私たちの父なる神と主イエス・キリストから…』

ここ 2 節の前半を見てみますと、『私たちの父なる神と主イエス・キリストから…』とあります。神様の与えてくださる、恵みと平安の源についてパウロは教えてくれているのですが…、実は、このこの箇所は、『私たちの父なる神』という言葉と、『主イエス・キリスト』という言葉とが、『…と…』という言葉(英語で言うと、and)で結ばれています。…でも、それに付随している、前置詞の『から…』という言葉は、1度しか使われていないのです…。

実は、こういった表現は、ギリシャ語の文法では、それらのものが、全く同等のものである！ということを表わしているのです。つまり、私たちの信じている…、『父なる神様』と、『主イエス・キリスト』とは、全く同等の存在であって…、そこから、神様の与えてくださる…、『恵みと平安』、つまりは、神様の祝福が下ってくる…、という話しをパウロはしているのです。

…ですから、例えば、「私は、聖書の教える唯一の神様を信じてはいるが、イエスを神として…、また、救い主としては信じない！」とおっしゃる方がいるなら、その方は、聖書の根本の教えに同意していない！ということをお覚する必要があります。残念ながら、そういった方に、神様の教える…、本当の恵みや平安が訪れるはずありません。だって、その方は、その源である、イエス様を拒み、イエス様と繋がっていらっしやらないのですから…。

●『恵み』とは？

それと、ここで『恵み』と訳された言葉(χάρις)は、ギリシャ語の辞書では、「親切、恩恵など。また、特に、上位の者が下位の者に示す特別の寵愛」と説明されています。要は、「私たちが何かしたことへの報酬などではなく、一方的に与えられる良いもの」という風に考えてくださって良い、と思います。

神様は…、また、主イエス様は、私やあなたに…、いえ、この地球上の全ての存在に、良いものを与えてくださっています！しかも、私たちが何の良いこともしていないのに、です！皆さん、それが、真の神様なのです。神様とは、『悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。…』(マタイ 5:45)、つまり、惜しまずに…、恵みを与えてくださる…、そのような御方なのです。…そのような神様からの、最高の恵みは、罪の赦しです。本来なら、私やあなたが犯した罪の罰を、イエス様が身代わりに受けてくださったのです！それが、あの十字架です。

天の神様は、太陽や雨といった自然からの恵みだけでなく、救いという1番大きなプレゼントを、私にも…、また、皆さんにも、差し出してくださっています！でも、それを受けとるか受け取らないか？それを決めるのは、あなた自身の選択です。…どうか、1日も早く、この神様の恵みに気づいてくださって、救いの恵みをご自分のものとしてくださいますようお願いいたします。

●『平安』とは？

最後、ここで、『平安』と訳されてある言葉(εἰρήνη)は、ただ単に、争いや問題がないような状況を指しているわけではありません。確かに、日本語の辞書で、「平安」という言葉を引くと、「無事でおだやかであること。変事もなくやすらかであること。無事。平穩。安穩。…」とありました。しかし、マタイ 5:9 の、

『平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから。』というみことばから学んだ時にもお話ししましたように、聖書が教える、『平和』や『平安』とは、そういった問題のあるなしに関わらず、「最高のものが…、素晴らしいものが与えられている…」といったような状況を表わすのだそうです。ちなみに、日本語では、「平安」とか、「平和」といった言葉の使い分けがありますが、ギリシヤ語では、これらは同じ言葉で、区別はありません。

つまり、こういうことなのです。日本人的には、『平安』と言われると、何の問題の無い…、そういった状況を思い浮かべるかも知れませんが、聖書のみことばは、必ずしも、そうは教えません。ひょっとしたら、そこには何らかの問題があるかも知れないし…、試練や迫害があるかも知れないのです。あるいは、痛みや悲しみがあるかも知れません…。しかし、実は、私たちは、最高のものを、神様から受け取っているのです。確かに、その時には、そうは思えないかも知れませんが…。しかし、実は、それこそが、私たちにとって、本当に必要なものであり…、真の神様を信じ、信頼しているからこそ、そういったものも、感謝して受け取っていくことができるのです。…でも、そのためには、必ず、信仰というものが前提になってくるのです。

<励ましの言葉>

まあ、敢えて、今は極端な例を紹介しましたが…、この言葉は、当然、通常、私たちのイメージするような、「平和、安全、無事」なども意味します。ある神学者(=ハワード・ヘンドリックス)は、この言葉を、このように説明してくれました。「私たちはかつて羊のようにさまよって自分勝手な道を歩んでいました。その私たちが、神のところに戻ったらどうなるでしょう？ ちょうど、迷子の子どもがはぐれた親のところに戻るように、そこに本当の安らぎがあるのです。まさに、私たちは生まれながら、神に背いて好き勝手な道を歩んでいましたが、私たちが、私たちを造り…、私たちのたましいの管理者であり…、私たちの本当の神である方のもとに帰った時に、本当の平安をいただくのです。何故なら、その平安というものは、私たちが努力して得るものではなく、神がくださるものだから…。神のもとに帰らなくては、決して得ることができないのです。」って…。

パウロは教えます、私たち人間が、本当の恵みを…、平安を得るためには、この祝福の源である、真の神様を知ることなしには有り得ない！ って…。皆さん！ そこが、スタート地点なのです。神様は、あなたに対して、祝福を与えようとしてくださっているのです！

問題は、あなたです。…あなたが、神様からの祝福を頂こうとしているかどうかです。また、クリスチャンであっても、実は、その神様の…、偉大な祝福というものを、あまり気付いておられないかも知れません。どうぞ、この神様の前に、あなたの心を開いて、神様からの祝福を…、受ける者となっていたきたいと、心からお勧めいたします。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。